今を生きる

～亡くなった命に光を～

大震災伝える苦しみの先に

「亡くなった人や遺族の悲しみを借りて口伝（くでん）するのはとても苦しいことなんです。亡くなった人には一人一人にそれぞれ名前があり、人生があり、夢を持って生きていた。その証しを届け続けたい」。いわき語り部の会（大谷慶一会長）の小野浩さん（67）はそう話し、目にうっすらと涙を浮かべた。私たちジャーナリストスクール第４班は福島県双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館で小野さんの話を聞き、大震災を伝える活動を取材した。（**中條文人**＝安積二小５年＝、**本田樹**＝白江小６年＝、**木村美結**＝郡山ザベリオ学園中１年＝、**篠木優**＝大鳥中２年＝、**佐藤柑菜**＝安積高２年＝）

生きた証し届けたい

いわき語り部の会　小野浩さん

ハンカチを手に、姫花さんの夢を語る小野さん

いわき語り部の会は２０１２（平成24）年に発足し、今年で10年になる。いわき震災伝承みらい館を拠点として、未曽有（みぞう）の大震災を体験した「震災語り部」16人が記憶や教訓、被災地の復旧・復興の現状を伝えている。東日本大震災発生時、小野さんはＪＲいわき駅前ラトブの図書館の郷土資料専門員として働いていて被災した。14万冊の本が棚から落ち、外に逃げ出すのがやっとだったという。いわき市小名浜の実家も被災し、家族は逃げるのが数分遅れていたら津波に巻き込まれていた。そして身近な人が命を亡くし、その人たちの生きた証しを残したいと語り部になった。

◇　◇

「震災を風化させてはならない。何人亡くなったとか、避難者が何人いるなどと表面的に震災を伝えるだけでなく、亡くなった方一人一人の名前、人生、夢などを聞き取りして口伝する。口伝することはつらいと感じる時もあるが被災者の方の生きた証しを伝えることが私の生きた証しにもなる。私にしかできない仕事だ」と語る。一方、震災による直接死に対して、自殺や孤独死などといった関連死が多いことにも触れ、まだ避難している人も多く、精神的ケアが必要だとも語る。東京五輪や新型コロナウイルス禍によって、東日本大震災の報道が少なくなり、風化を加速させてしまったように感じるとも話していた。

伝承館で震災当時の様子や窮状を学ぶ取材班

◇　◇

将来、デザイナーになりたいという夢を持ちながら津波の犠牲となったいわき市の鈴木姫花さん＝当時10歳、豊間小４年＝。姫花さんが生前に描いた絵をデザインにして作ったハンカチの物語を紹介してくれた。亡くなった人や遺族の本当の悔しさ、つらさを理解することはできないかもしれないが、姫花さんの生きた証しを詳しく知ることができた。小野さんは話の最後に手品を披露してくれた。「笑顔が見たい。人を笑顔にさせたい。それが語り部の原点だ」と熱く語る。

小野さんの夢は若い語り部を育てることだという。「震災を知らない若い世代が福島の今を知り、福島の未来を描いてほしい。そのためにも口伝できる人材を育成し、風化させないアクションを起こしたい」と語る。伝える苦しみの先に〝本当の福島の復興〟があると信じたい。

編集後記

私は５歳で東日本大震災を経験した。東京電力福島第一原発事故により、家族で新潟県に避難した。私の誕生日は３月21日。誕生日にはもちろん、父母からプレゼントをもらうことができなかった…。そんな記憶が残る東日本大震災。しかし今回の取材を通して、深くて重たい話をたくさん聞くことができた。人間だけでなく、動物たちもたくさん悲しい思いをしたのだ。知らなかった。でも私は幸いにして福島で起きたこと、復興に向けて頑張る福島の今をこの目で、この耳で、この心で知ることができた。口伝するつらさと向き合いながら語り部を続ける小野さんの思いを、そして私が取材したこと、感じたことをまず、身近な人に伝えたい。そして新聞という正しい情報を伝えるメディアで多くの人に発信したい。現状を正しく伝えることが私にとっての復興の第一歩だ。

（班長・**佐藤柑菜**）

伝承館をバックに記念撮影に納まる取材班